

『念仏道歌西之台』翻刻と解題

小野恭靖

日本・アジア言語文化講座

(二〇〇七年二月二十八日 受付)

江戸期に刊行された道歌集のうち、堀原甫の編になる『念仏道歌西之台』(天保二年へ一八四一)刊・めとき屋幸助版」と題される一本が存在する。この書は仏教信仰のうち、浄土教信仰の理念に基づいた一二〇首(凡例中の五首を含む)の道歌を収録する重要な道歌集である。

筆者は江戸期の道歌集に注目し、これまで『一休和尚いろはうた』『道歌心の策』『道歌百人一首 麓枝折』について考察を加えた。本稿では大阪教育大学小野研究室蔵『念仏道歌西之台』を翻刻紹介し、その意義を明らかにしていきたい。

キーワード…文学、道歌、堀原甫、『念仏道歌西之台』、一休

はじめに

江戸期に刊行された道歌集のうち、堀原甫の編になる『念仏道歌西之台』(天保二年へ一八四一)刊・めとき屋幸助版」と題される一本が存在する。この書は仏教信仰のうち、浄土教信仰の理念に基づ

いた一二〇首(凡例中の五首を含む)の道歌を収録する重要な道歌集である。

筆者は江戸期の道歌集に注目し、これまで『一休和尚いろはうた』『道歌心の策』『道歌百人一首 麓枝折』について考察を加えた。本稿で紹介する『念仏道歌西之台』には、先行する『道歌心の策』『道歌百人一首 麓枝折』と同一の道歌は一首も採られていない。筆者堀原甫が意図的に重複を避けたものであろう。

以下、本稿は『念仏道歌西之台』の基礎的考察として、大阪教育大学小野研究室蔵『念仏道歌西之台』を翻刻紹介しつつ、本書の意義を明らかにすることを目的とする。なお、翻刻に際しては各歌の頭に算用数字の歌番号を付した。

一 『念仏道歌西之台』翻刻

『念仏道歌西之台』(外題／題号の下に蓮華の絵)

それやまと歌は人の心を種として、万の言の葉とはなれり。浄土の
 称名もまた人の信をたねとして西方に八葉の花をひらく。いづれ心を
 離れて歌なく、信をはなれて浄土なし。予とし頃に安養浄土をしたひ、
 見ると聞ごとに専念の先達の詠おき給へる和哥を集め桜木に物し
 て、西方往生を願ふもの、明くれ目うつしとなして、猶専修の道に
 す、むたよりとなすことしかり。

天保十二年丑の春 三五園原甫誌

凡例

一 此集を西の台と名づくることは、

1 西へ行月にちぎりをむすびても心にかゝるむらさきの雲 性

助親王

2 にしへゆく月に心のすみぬればうきよの中はねられざりけり

座主院源

3 月も日も西へくと入相のかねてぞしらす極楽のみち 読人

不詳

4 夜もすがら西に心の引声にかよふ嵐の音ぞ身にしむ 忠海僧

正

5 へだてなよ終には西とたのむ身の心をやどす山端のくも 為

相卿

是等の歌を題とするなり。なほありぬべし。もとよりいがめる心に
 秀哥をえらめるにもあらず。たゞ思ひ出るまゝにして、前後新古のさ
 べちもなし。かななづかひの事も唯聞なれ見なれたるに従ひ、要とす
 る所は一文愚痴の身となして、一向専念の枝折なることをねがふにあ
 り。猶もらしたるは後編にゆづると云。

豊聡聖徳皇太子

6 いそげ人弥陀の御船のかよふ世にけうおくればいつかわたらむ
 比叡山開基伝教大師 二首

7 きえてゆく露の命を其まゝに蓮のうへにおくぞたふとき

8 あきらけく後のほとけの御代までもひかりつたへよ法の灯
 高野山開祖弘法大師 二首

9 皆ひとは阿字より出て阿字に入りつひにはかへる阿字のふるさと

10 我が、ろ仏になせばほとけなりあまり易きに人ぞうたがふ
 空也光勝上人 三首

上人 北山の草庵に住たまひけるととき、ひとつの鹿常に来りて、上

人の膝もとに馴近づく。一日其鹿獺師定元のために死せり。上人ふか

く歎き、其角を乞とりて、柱杖にゆひ付給へり。のち洛に出て、四

五条のはしに座し、または町小路をめぐりて人を化度し給ふ故に、人

皆称して市上人とぞまをしける。

11 ひとつたびも南無あみだ仏といふ人のはちすのうへのほらぬはなし

12 山川のすゑにながる、椽がらも身をすて、こそうかぶ瀬もあれ
 俳諧体

13 念仏は野にも山にもまをしおけ鼠も曳かず犬もくらはず

禅林 永観律師 三首

師は三諦を宗とし、また弥陀専念の道を修し給ふ。禅林寺に在て

行道の時、本尊弥陀仏、師をかへりみて永観遅しとのたまひし事、

世の人口にあり。実にふしぎ奇特の律師にておはしける。

14 世を捨てあみだほとけをたのむ身はをわりおもふぞうれしか

りける

15 うら山しいかなる空の月なればこゝろのまゝに西へ行らむ

16 いにしへにいかなるちぎりありてかは弥陀につかふる身とな

りにけむ

慧心源信僧都 四首
おなしくもとうあんやうに

同 妹 安養尼 一首
ごうあん

17 なつ衣ひとへにみだを憑むかなうらなく西をおもふ身なれば

18 極楽を願ふおもひのけぶりこそやがてむかへの雲となるらん

19 極楽を願ふは富士のたかね仏この上もなきさとりなりけり

20 うへもなき功德とき、し弥陀の名のあまりのこととなへ安さよ

俳諧体のうた

21 此あまが極楽おかす罪あらばめしとりたまへみだの浄土へ

中将法如尼

慈母の塚にまうで、よめる

22 まれに来ておもふも淋しまつかぜをひとりや苔のしたに聞ら

僧正 遍照

23 すゑの露ものしづくや世中のおくれ先だつためしなるらん

小野小町

24 あるはなくなきはかずそふ世中にあはれいづれの日まで歎かん

相模

25 埋火をよそに見るこそかなしけれきゆればおなじ灰となる身を

吉水慈鎮和尚 七首

26 哥よまず後生ごゝろのなき人はさこそ寢覚のきたなかるらん

27 つの国のあしの八重ぶきひまもなくとなへて過う南無阿弥陀仏

28 あみだ仏と十たびとなへてまどろまんやがてまことの夢にも

ぞなる

題三界無安

29 まどひゆく浮世のなかにもゆる火をふるさと、のみおもひけ

るかな

30 いたづらに過にしことや歎かれむうけがたき身の夕ぐれの空

題無常

31 皆人のしり顔にしてしらぬかな必しぬるならひ有とは

32 極楽へまだわがこゝろ行つかずひつじの歩みしばしとまれ

和泉式部 一首

33 タぐれは物ぞかなしきかねの音あすも聞べき身とししらねば

性空上人にして

34 くらきよりくらき道にも入ぬべしはるかにてらせ山のはの月

小大進

35 立さらぬ誓ひたのめばおのづからはなの台にのぼらざらめや

佐藤西行法師 二首

36 夢さむるかねのひゞきにうち添て十たびの御名をとなへける

かな

易往而無人

37 西へ行月をやよそにおもふらんこゝろにいらぬ人の為には

法然源空上人 浄土宗始祖 円光大師 十首

38 往生は世にやすけれど皆人のまことの心なくてこそせね

39 憂きことのかさなるこそは嬉しけれ身をいとふべきたよりと

思へば

40 柴の戸に明くれかゝるしら雲をいつむらさきの色に見なさむ

41 あみだ仏といふよりかは津国のなにはのことかあしかりぬ

べし

42 阿弥陀仏とこゝろは西に空蟬のもぬけはてたる声ぞすゞしき

43 われはたゞ仏にいつかあふ草こゝろのつるにかけぬ日ぞなき

44 雪のうちにほとけの御名を唱ればつもれる罪ぞやがて消ぬる

45 ともしればもとの憂身に成ぬべしつねにこゝろをおどろかさ

ばや

46 ちとせふる小松のもとをすみかにて無量寿仏のむかへをぞまつ

47 後世のきづなとなれる妻子ほどせて仏の恩をたふとめ
 寂蓮法師

引接結縁の心を
 48 たちかへり苦しきうみにおく網のふかき江にこそこゝろひく
 らめ

阿仏尼

49 いつか見む八のくどくの池にさく四色のはちすの清きひかりも
 西山善慧上人 二首

50 まことあればかなはぬ道もかなふなりましてほとけのちかひ
 有をや

51 若ぞともこけならじとも西の山おもふも道のさはりなりけり
 鎮西聖光上人

52 ひし〜とこのまばひとたのためかしなまさがしきはみだに
 うときぞ

53 中々にほれて念仏まをせかしこざかしがほはみだにうとけれ
 と作りて、よし田の兼好法師がよめるともいふ。いづれが是
 なるや。

宇津宮頼綱入道蓮生

題下品下生

54 道もなく忘れはてたるふる郷に月はたづねてなほもすみけり
 熊谷直実入道蓮生 三首

55 此身をば薪とともにこりはて、燃たつばかり弥陀ぞ恋しき

56 約束の念仏はまをしさふらひきやらふ遣らじは弥陀のはからひ
 57 浄土にも剛のものや沙汰すらんにしにむかひてうしろ見せ

ねば

已上二人遁世してともに開祖法然上人の御弟子となり、また
 法名もともに蓮生と号しける。

親鸞善信聖人 四首

58 仏よりさきにさとれる他力をば釈迦もとかれず弥陀もしられず
 59 何事もみないつはりの世中にしぬるばかりぞ誠なりけり
 60 あすありとおもふもはかな桜花よるはあらしの吹かぬものは
 俳諧体のうた

61 念仏を只なげ入ておけよ人みだの浄土を宝蔵にして
 正三位家隆卿 二首

年八十にちかくしてはじめて称名門に入ることをよめる

62 かくばかり誓ひましますみだぶつをしらで久しくとしを經に
 けり

63 中々に罪ある身こそうれしけれさらでは弥陀をたのまざらまし
 64 極楽は日に〜ちかくなりけりあはれ嬉しきとしの暮かな
 みなもとてしよりのあそん

源 俊頼朝臣 一首

65 くるしもうしとも物をおもひては見し夢の世のこゝろなり

けり
 安養浄土にはもろ〜のくるしみなく其くるしみの名だに聞
 ずとぞ

66 苦しきもなしとぞさらにいはし水名にながれたるみだの御国は
 仙慶法師

67 ごく樂ははるけきほど、き、しかどつとめていたるところな
 りけり

明遍僧都

68 けふの日もくるゝばかりとおもへどもいのちをせむるつかひ
 なりけり

梅尾明慧上人

69 目しゐたる亀のうきゝにあふなれやたま〜えたる法のはし
 船

笠置解脱上人

70 一つの世のいつの時にあふしそめて久しくさめぬ夢を見るらん
71 これをこそ誠の道とおもひしにうき世をわたるはしとこそなれ
記主良忠上人

一枚起証文を良曉につたへて

72 をしへ置此ことのはの行末をおもひわすれず我をとぶらへ
光明良曉上人

おなじく起請文を草子につたへて

73 伝へおくをしへのまゝにたがはずばひとつ蓮の露もむすばん
慶政法師

於蓮華八葉上各有如来

74 法の水ふかきさとりを種としてむねの蓮のはなひらきける
兼空上人

淨利の九品をよめる

75 よしあしの人をわかじと蓮の花九しなまでさきかはるなり
遊行一遍上人

76 世にこゆる誓ひのふねを頼むなくなるしきうみに身はありな
から

77 となふれば爰に居ながら極楽の聖衆のかずに入ぞうれしき

78 よしあしを心にだにもすてぬればおなじき世も住よかるらん
遊行陀阿上人

79 うかみがたき心をしればもらさじとちかふ仏の御名ぞ嬉しき
深草隆信上人

一蓮托生の心を

80 深草の露のかごとを忘れずば同じ蓮のちぎりかはらじ
吉田兼好法師

81 いつかまた世のうき雲の外に見むこれより西にすめる月かけ

頓阿法師

82 わが心迷ひのたびに唱ふれば罪さへ御名のかずにこそ入れ
83 露の身のまだ消ぬより心こそ花の台にまづやどりぬれ
淨弁法師

84 ふして思ひ起ておもふもかはらぬは弥陀の御法のつとめなり
けり

慶運法師

85 しなぐにたつる御法のくらゐ山のぼりはて、もわが身なり
けり

向阿上人

86 池上にわれだにすまばよし水のながれのすゑはたへじとぞ思
ふ

真阿上人

87 ほれぐと南無阿弥陀仏となふればこゝろなきこそこゝろ
なりけり

淨華厚譽上人

88 おのづからおのづとのりの船なれや行もかへるもこゝろ任せ
に

塩屋右兵衛入道信生

89 よしさらば我とはさ、じあま小舟みちびく汐の浪にまかせて
一休和尚

身は仏心示を悟りながら、慈母に専修の道をすゝめて、法然
上人の一枚起請文をうつしまゐらせて其奥にしろされたり

90 九年まで座禅するこそ無益なれまことのときは弥陀のひと声
蓮如上人

91 うれしやなとふとやなどはいはれけり南無阿みだぶの口のひ
まには

増上西譽上人
さうじやうゆうしやう

92 ひとり来て独さりぬる道なればつれてもゆかずつれられもせ

松風雲巖和尚
そうふううんがん

93 なむあみだ南無あみだぶつなむ阿みだなむあみだ仏なむあみ

だなり

東山国阿上人
とうざんこくあ

94 ともかくも流るゝ水にまかせなばやすかりぬべき塵の世中

白幡幡随上人
しらばたばんずあ

95 極楽も地獄もおのが身にありて鬼やほとけにこゝろこそなれ

古知谷澄禪上人
こちやうじやうぜん

96 よしとのみ思ひてなすも難波濁ともにあしかる業としらずや

因果目前

祐天大僧正
ゆうてん

97 後世のむくひをおまへまがれるも直もおなじわが影を見て

貞安和尚
ていあん

98 悪人も念をかへさばたすくべきみだのちかひのたのもしきかな

以八上人
いはち

99 あみだ仏たすけたまへの外請な思ふもいふもまよひなりけり

袋中和尚
たいちやう

100 つゝめども人の心のよしあしは終りの時にあらはれにけり

称念上人
しやうねん

101 願へたゞ誰もきゆべき露の身のおき所なる花のうてなを

厭求上人
あえん

102 うきことのかさなるこそは嬉しけれ世をいとふべきはしとお

他力のこゝろを

103 吹かぜに帆かけてはしる舟なれば櫓かひをとるもさはり成けり
吹かぜに帆かけてはしる舟なれば櫓かひをとるもさはり成けり

隱僧浦蓮
いんそううれん

104 さりともと弥陀の御法をたのむかなあしわけ小舟さはりある

岡崎澄月
おかざきしょうげつ

105 そなたぞも心すませば難波寺てらす影も西に入ぬる

伴蒿溪
ばんかうせき

106 さまゝの御法の雨もひらくべきこゝろの花のためならぬか

小沢蘆庵
おざわあそあん

107 つひにわが行べきかたとながむればいとなつかしき西の山か

橘千蔭
たちばなのちかげ

108 はては皆うてな露の玉なれや誰かは終にきえ残るべき

平春海
たいらのはるみ

109 年ふればたゞ夢とのみたどる世にいかで我身をうつゝとも見

松島雲居禪師
まつしまうんこ

110 あみだ仏はこゝをさること遠からずまよへばはるか西にこそ

西方の本来空に往生し無量の寿をば得るぞめでたき

まつしまや雄島の海はごく楽の弘誓の舟にのりの陸奥

無能和尚
むのう

113 あさな夕なほとけにむかふたび毎に今をかざりとおもひはげ

まぜ

114 なげきつゝきのふもけふもくれ竹のうきふしごとにといとふ

世中

諦忍上人 二首

115 なにはなる身を尽してもねがひてし花のはへにぞ名をしるしける

116 濁すなよ代々にたへせぬよし水の清きながれの末をくむ人
芸陽学信上人

117 中々にことの葉ぐさのしげ、ればとかぬ御法をさく人もがな

118 かぎりなく迷ひし事を尋ればたゞこの今のこゝろなりけり
紀州徳本上人

易住而無人

119 往生は世にやすけれどみな人の申す心のなくて社せず
120 只まをせ万のつみは深くとも南無阿弥陀仏にかつ罪はなし

堀原甫居士集編

神仏道歌松の響 中本図画入 全

此書は三社の御神詠をはじめ、諸国の神々又は諸仏菩薩の道歌、或は神仏感応の詠歌を集めて両部垂迹和光同塵の教をしめす書也。

天保十二年丑の春

京都書林寺町通蛸薬師下ル めとぎ屋幸助梓行

二 『念仏道歌西之台』 解題

『念仏道歌西之台』は仏教信仰のうち、浄土教信仰の理念に基づいた二〇首（凡例中の五首を含む）の道歌を収録する重要な道歌集である。先行する『道歌心の策』『道歌百人一首薨枝折』と同一の道歌は一首も見られない。おそらく、編者が意図的に重複を避けたもの

であろう。編者は堀原甫^②で、天保十二年（一八四二）春の序、同年京都の書肆めとぎ屋幸助から上梓された。冒頭には『古今和歌集』を踏まえた序が置かれる。収録された道歌の作者は上代の聖徳太子から近世の紀州徳本上人に至る七二人（凡例中の四人を含む）で、うち空也光勝上人、禅林永観律師の二人については、道歌に先立って略歴が掲出されている。また、連続で収録される宇津宮頼綱入道蓮生と熊谷直実入道蓮生の二人の各道歌の掲出後にも、共通する簡単な略歴の紹介が置かれる。本書の特徴のひとつとして、道歌作者の配列は必ずしも時代順とはなっていないことが挙げられる。また、作者に専門歌人や文学史上著名な人物が重点的に採用されていることもまた別の特徴として指摘できる。西行や慈鎮（慈円）のように他の道歌集にも見られる作者は措くとしても、小野小町、僧正遍照、相模、小大進、源俊頼、寂連、藤原家隆、慶政、阿仏尼、吉田兼好、頼阿、浄弁、慶運、小沢蘆庵、橘千蔭、村田春海など他の道歌集にはほとんど掲載されることのない歌人や文学者の作とされる道歌が並ぶ。その一方、作者ごとの収録歌数は一首から一〇首と幅があることも指摘できる。もっとも多い一〇首が採られたのは、やはり我が国の浄土教信仰の大立者である法然源空上人（円光大師）である。また、収録歌のうち、題もしくは詞書が付されたものは一九首ある。鎮西聖光上人の道歌の後には兼好作として人口に膾炙する類似の道歌が掲出され、その旨の注釈が添えられている。兼好は他にも一首の道歌が収録されており、都合二首が見られることになる。また、本書に収録された道歌の中には、いわゆる釈教歌として勅撰集やその他の和歌集に入集した著名な和歌も見られる。勅撰集への入集状況を記せば、『拾遺和歌集』が11番歌「ひとたびも……」、34番歌「くらきより……」、67番歌「ごく楽は……」、『千載和歌集』にも入集の三首、『新古今和歌集』も23番歌「すゑの露……」、24番歌「あるはなく……」、31番歌「皆人の……」

の三首、『続後撰和歌集』が71番歌「これをこそ……」、『新拾遺和歌集』が15番歌「うら山し……」、『玉葉集』が40番歌「柴の戸に……」、『新拾遺和歌集』が8番歌「あきらけく……」の各一首となる。この他、41番歌「あみだ仏と……」は『夫木和歌抄』に、62番歌「かくばかり……」は『古今著聞集』に、57番歌「浄土にも……」が『古今夷曲集』『醒睡笑』にも採られた著名な歌である。また、一休に仮託された道歌と重なる例も散見される。12番歌「山川の……」は『一休咄』に、59番歌「何事も……」は『統一休咄』に、本書でも一休作の道歌とされる「九年まで……」が『一休骸骨』に収録される。これは道歌と言えば「一休作とされるようになった江戸期以降の特徴を示す事実と考えられる。

なお、本書冒頭の凡例には「猶もらしたるは後編にゆづると云」とあるが、後編の存在は確認できず、実際には上版されなかったものと推定される。

注

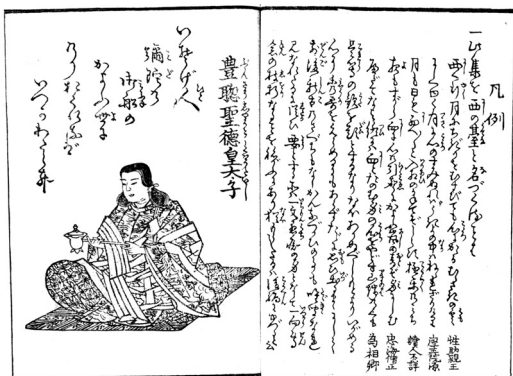
- (1) 『道歌心の策』『道歌百人一首麓枝折』については拙稿『道歌心の策』小考（『禅文化研究所紀要』第二十八号・平成18年2月）／小著『韻文学と芸能の往還』（平成19年・和泉書院）所収）において論じた。なお、本書は道歌作者の絵入りで、『道歌心の策』『道歌百人一首麓枝折』と同様の体裁が採られている（下段掲載の図版参照）。

- (2) 生没年未詳。名は常信・経信。通称は源右衛門。号は原甫・三五園・月磨・松月堂など。この人物が創作に関わった他の道歌集に、『道歌心のうつし画』（文政一〇年・一八二七）成立）、『道歌心の姿見』（天保四年・一八三三）刊）がある。また、『国書人名辞典』所収「堀原甫」の項には京都の書肆小川源兵衛と同一

一人かと見える。この書肆は『道歌心の策』『道歌百人一首麓枝折』も刊行していて注意される。

- (3) 11番歌「ひとたびも……」は勅撰集には『拾遺和歌集』に入集した歌であるが、『古今著聞集』にも見えている。さらに勅撰集の他、説話集にも取り上げられた例としては、11番歌が『宝物集』に、15番歌が『沙石集』に、24番歌が『宝物集』『十訓抄』に、34番歌が『宝物集』に見える。

- (4) この歌は他にも『そしり草』や浄瑠璃「一谷嫩軍記」に見え、さらには白隠慧鶴や仙厓義梵の禅画画賛にも書き入れられた。詳細は小著『絵の語る歌謡史』（平成13年・和泉書院）において述べた。



A Study on “Nenbutsudouka Nishinoutena
(念仏道歌西の台)”

ONO Mitsuyasu

*Course of Japanese and Asian Languages and Cultures,
Culture Studies, Department of Arts and Sciences
Osaka Kyoiku University, Kashiwara, Osaka 582-8582, Japan*

This report introduces “Nenbutsudouka Nishinoutena (念仏道歌西の台)” .

“Nenbutsudouka Nishinoutena” is a book which records instructive songs for the common people. Instructive songs were called “Douka” in Japanese. There are a lot of unknown materials about instructive songs. “Nenbutsudouka Nishinoutena” is one of this.

This report is the basic research of “Nenbutsudouka Nishinoutena” .

Key Words: literature, instructive songs, Hori Gempo,

“Nenbutsudouka Nishinoutena (念仏道歌西の台)” , Ikkyu